The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	文学論争以前のミルトンをめぐる遣り取り : 文学論争の再考にむけて(2)
Author(s)	福田, 覚
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2021, 18, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85050
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

文学論争以前のミルトンをめぐる遣り取り

── 文学論争の再考にむけて(2) ──

福田　覚

前号では、ゴットシェート派とスイス派、ライプツィヒとチューリッヒの間で行われたいわゆる文学論争におけるクロップシュトックの評価を取り上げた。本稿以降ではクロップシュトックに対する評価がその延長上にあったと思われるミルトンに対する評価や、そのミルトンに対する評価を反映していると思われる崇高論に対する立場選択に目を向けるようにして、そうしたところを土台に文学論争の再検討を試みていきたいと考えている。そしてそこから、自然模倣という詩学の基本理念とこの問題との関わり、啓蒙観の違い、両陣営が啓蒙に対してもっている物語的理解の相違を読み解いていければと思う。それに向けて本稿では、ミルトンについて、論争の両側、チューリッヒとライプツィヒでどのように見られていたか、ひとまずボードマーがミルトン擁護の書を出版するまでを振り返っていきたい。表題で「文学論争以前」としているのは、1740 年に到るまでを想定している。

1727 年にフランクフルトとライプツィヒで出版された想像力論、『想像力の影響と使用について』[1]は、献辞の末尾に付された著者名に“I.B.I.B.”とあり、ボードマーとブライティンガーが書き手と考えられている。この著作はクリスティアン・ヴォルフに献げられているのだが、その献辞のなかにミルトンの名前が出てくる。ミルトンの『失楽園』は長い間、人に知られず読まれないままであったが、一人の立派な識者がこの詩人の傑作を高く評価することをイギリス人に教えた、と述べられる。それに続いて、献辞の書き手は、同様の運命がヴォルフに訪れることを予言している。ヴォルフは、1723 年にプロイセン国王の勅令によってハレから追放されているが、不遇のあと広く受け入れられて高みに至る存在であるということを、ミルトンを引き合いに出して語っているのである。スイス派にとってミルトンとヴォルフがどういう存在かうかがわせるエピソードと言えるだろう。

1.『失楽園』の翻訳と出版をめぐる事情

ゴットシェート（1700-66）がフランスの演劇を手本としたのに対して、『スペクテイター』に刺激を受けて『画家談論』を発行したように、ボードマー（1698-1783）の視線は主としてイギリスに向けられていた。ボードマーはミルトンの翻訳者となるのだが、ボードマーが『失楽園』（初版、1667）の翻訳を最初に出版したのは、1732 年であった[2]。後続の

版は、1742 年、1754 年、1759 年、1769 年、1780 年に出されている。因みに、『失楽園』のドイツ語訳は、ボードマーの前にも、エルンスト・ゴットリープ・フォン・ベルゲ（ベルク）による 1682 年の訳がある[3]。ボードマーの翻訳は、表題の最後に「散文で（In ungebundener Rede）」とあるように、押韻を用いない散文訳であった。このボードマーの翻訳が若いクロップシュトックにとって導き手となったこと、やがて『救世主』を書いたクロップシュトックがチューリッヒとライプツィヒの間の論争の対象となって論争に巻き込まれていったことは前号で論じた通りである[4]。

この翻訳は、ボードマーが訳業を行ってから出版されるまでの間にかなりの年数が経っていることが分かっている。

1724 年 1 月 28 日のツェルヴェーガーに宛てた書簡に、ボードマーが急にミルトンの作品全体を訳そうと決意した「２，３か月前」の状況が記されている[5]。そのことから、1723 年が訳業の開始であろうと推測できる。この書簡のことを伝えているハンス・ボードマーの報告に拠れば、この 1 月 28 日の書簡の他の文面からは、翻訳の完成が近いことがうかがわれ、何週もしないうちに全体をもう一度通して見直したいと考えていたようである[6]。しかし、ツェルヴェーガーに宛てた同年 3 月 23 日の書簡では、まだ完成には到っていないことが書かれていて、想定していたよりも長引いている[7]。

のちに 1732 年 2 月 5 日付けでボードマーがゴットシェートに宛てた書簡において本人が語っているところに拠れば、ボードマーはこの翻訳を 1724 年中には完成していたとのことである[8]。この書簡とともに、ボードマーは、ゴットシェートにこの訳書を 1 冊贈っている。

1724 年には訳業を終えていながらその出版が大幅に遅れたのは、教会の検閲のためと考えられている。これについては、モーリッツ・フュースリがミヒェル・フーバーに宛てた 1725 年 1 月 25 日の書簡の記述が、一つの証言となっている。チューリッヒには、ミルトンが英語で書いた『失楽園』をドイツ語に訳したということで評判のボードマーのような人がいるが、その訳業が印刷できないでいる、ということをフュースリは書いている。

> 「それはこの地〔チューリッヒ〕で印刷されるはずでした。しかし、教会の検閲官は、とても神聖な主題にしてはあまりにも夢想的な書物（ein allzu Romantsche Schrift）だと見ています。それは、過度に高尚で荘重すぎるものです。ですが、印刷を許さなかったというのは、正しくありません。」[9]

「夢想的」と訳した語は原語では Romantisch と書かれている。神聖な主題にしてはあまりに夢想的というのは、のちにミルトンがまさにそうした側面をめぐって文学論争の対象になることを考えると、すでに翻訳書を出版する以前からそのことが問題になっている点が興味深い。

それに対するフーバーからの返信には、ボードマーとは面識はないが、共通の友人がい

るので評判はよく知っていて、ミルトンの『失楽園』の翻訳を賞賛するのを耳にしている、ということが書かれている。それに加えて、フーバーは、学識者の成果を締め出すのは残念だが、他方、聖書に世俗的な書物のような形式を与えようとするのも正しいことではない、と述べている[10]。

こうした考え方が妨げになって、ボードマーは出版社を見つけることができなかったようである。スイスだけでなく、一時的にドイツのエルベ川のところまで出版社を探して回ったが甲斐がなかった、という記述が残されている[11]。トーマス・ビュルガーの報告では、ボードマーがマルクス・ロアドルフの印刷業を支援して、そこで翻訳の原稿を印刷・出版したので、ミルトンの翻訳はいわば「自費出版」のようなものだと言われている[12]。

2．ドイツ語訳『失楽園』の前書き（1732）

ボードマーによる1732年の翻訳書には、ボードマー自身がミルトンの『失楽園』についていくらか報告を行う文章が最初に置かれている。イギリスでも約半世紀の間ふさわしい評価が得られなかったこと、サマーズが最初に賞賛し、続いてアディソンが『スペクテイター』でその並外れた価値を知らしめたことが述べられている[13]。ボードマーはここで、オランダ語訳、フランス語訳のほかに、半世紀先行したフォン・ベルゲの翻訳にも触れていて、この翻訳は評判にはならなかったが、熟慮の読者には注目され、原典を読もうという気にさせた、と記している[14]。

先行する様々な言語への翻訳について言及したあと、ボードマーは、自らの訳業に触れるかどうかで、次のように述べる。

> 「私が先人たちについて申し上げたことから、私が努力と意図をどこに向けているか十分に見て取れないというのであれば、私はここで自分の翻訳について語るべきなのであろう。だが、どの点でうまく行ったと思っているか申し述べると、偏向の疑いを引き寄せてしまうかも知れない。私の仕事自体がどの点で弱くて非難の余地があるか言及することは、私の場合、ひょっとしたら、他の方よりもたやすいのかも知れないが、謙虚さを装っているとの誹りを受けるかも知れない。」[15]

そうしてボードマーは、自身について語るのを控えて、ミルトンの精神にある「崇高な観念」とそれを表現する英語やドイツ語との関係に話をずらしていく。

> 「イングランドで最良と言える書き手の方々は、彼らの言語そのものがミルトンのもとでは崩れ落ちてしまい、彼の心のなかの崇高な思考を力いっぱい表現するには、あまりにも弱いものであった、と打ち明ける。それでもミルトンには、スペンサーやシ

ェークスピアが目の前にいた。彼は自らの語りを散文から区別するのに、様々な手法を用いた。たとえば、よその方言を真似たり、古くからの力強い言葉を引っ張り出してきたり、新たな言葉を作り出したり、言葉の組み立てを変えたり、聞き慣れないメタファーを考案したり、語りの節を交互に絡ませたりしている。しかし、これらすべては適度に、然るべき場所で行われているのである。彼を批判する者たちが一番何か言えるのは、これらの点についてである。しかしそれが単に表面的な事柄に過ぎないのと同じように、私がミルトンをうまく捉えられたのもおそらくはときおりのことなのかも知れない。」[16]

ミルトンには、崇高な思考を英語で表現するためのさまざまな言語上の工夫がある。それに対して、ミルトンを訳すボードマーはドイツ語で表現しなければならないが、その点に関しては、ボードマーは次のように書いている。

「ひょっとしたらドイツ語は、英語ほどは、よその富でもって自らを助ける必要はないのかも知れない。ミルトンにとって言語（Sprache）に不足があったという面は、私の場合は、その言語の読者（Sprachekundschaft）に不足があるということであった。言い換えるなら、ドイツ人の耳がこまやか過ぎて、耳慣れないメタファーが耐えられないとか、それと同時に私たちの判断力にはそれが力強すぎて、もっぱら耳に快くないということが原因で、私たちは快くないものを非難せざるをえないということなのである。」[17]

つまり、ボードマーは、ドイツ語で表現する場合に難があるとしたら、それは訳者の問題というよりは読者の問題だと言うのである。こうしたところに、ミルトンを受容できるような耳をドイツ語の読者にももってもらいたいという、ボードマーの啓蒙主義的とも言える願いがうかがわれる。

最後にボードマーは、そうした外面的な事情ではなくて、ミルトンの詩の内面的な本質について、別のかたちで論じることにした、と述べ、論考の公表を予告している。そして、真実らしさについて、ファーベル、パラーベル、アレゴリーについて教育がないと、古代の人の詩的な著作ではなく近代の作家の凡庸な小説で趣味を形成した読者は、ミルトンの思考やイメージに喜びを見出せないばかりか、それに混乱してしまうかも知れないから、いっそう急ぐつもりだ、という言葉でこの前書きを締めくくっている[18]。この翻訳から8年後の1740年に、後述するように、ボードマーはドイツの批評家を意識して、ミルトンを擁護する論考を著すことになる。そして、それまでの過程で、ゴットシェートの側からは、この擁護のための書の公刊を再三催促されることになるのである。

３.『批判的論叢』第２号の反応（1732）

他方、ライプツィヒの方に目をやると、ゴットシェートが改革し主導することになったライプツィヒのドイツ語協会は、1732 年から 1744 年まで刊行された『ドイツの言語、詩作、雄弁の批判的叙述のための論叢（Die Beyträge zur critschen Historie der deutschen Sprache, Poesie und Beredsamkeit）』（以下、『批判的論叢』と略記）という雑誌と関わりが深く、この雑誌はいわば協会の機関誌のように見做すことができるものである。この雑誌は、古代ローマや古代ギリシアの作家のドイツ語訳についてリストを掲載するなど、翻訳を重視している姿勢をうかがわせる[19]。1732 年の第 1 号には、1682 年のフォン・ベルゲ訳の『失楽園』について評論が掲載されていて[20]、その最後では、ボードマー教授がチューリッヒで散文で完成させたミルトンの新訳についても読者に報告する、と約束している。そして同じ 1732 年に刊行された第 2 号においてその約束は果たされ、第 9 番目の論考として、協会員による筆者名のない文章を読むことができる。

ただ、『批判的論叢』第 2 号に掲載された、ボードマー訳の評論は、批判的なスタンスは明確であるものの、さほど深みのある詩学的思考を述べようとしたものではなく、批判の内容としては翻訳の問題に焦点が絞られている。最初のページには、フォン・ベルゲの翻訳のあとドイツでは完全に忘れられていた「偉大な詩人」が、もっとよいかたちで知られるようになればよかった、という言葉があり、そのあと、散文訳は最も快適な手段だということが言われる[21]。

> 「同様に実際また、フランス人もたいていは、古い外国の詩人をそのような翻訳方法〔散文訳〕で切り抜けているものである。ドイツ語の音節の長短や押韻が翻訳者にもたらす束縛は、つねに文字のもとに留まり原文から決して離れないというふうにはさせてくれない。しかしまさにそのことによって、外国の詩人をその詩人の言語で読むときのあらゆる美もあらゆる誤りも生まれなくなる。そのなかの何かが悪くなって、何かがまたおそらく良くなった、というのが常である。」[22]

韻律や押韻で無理をする必要がない散文訳の方が原文から離れない翻訳ができるという発想が根底のところに見て取れる。

イギリスでのミルトンの評価や他の言語への翻訳についてはボードマーが前書きで述べているものの、自分自身の翻訳についてはあまり多くを語ろうとしていない、とこの評者は紹介している。それに続けて、匿名の評者は次のように指摘する。

> 「しかしながら、同じように、以下のことは正しい。イギリス人たちが打ち明けるように、彼らの言語自体がミルトンのもとでは崩れ落ちてしまい、彼の心のなかの崇高な思考を表現するには、あまりにも弱いものであったとするならば、ボードマー教授

は、私たちの言語のそのような強さを実際に示したので、ミルトンが彼の母語でもっていたよりもさらに多くの力や勢いをこの翻訳を通じて獲得したと言えたはずである。にもかかわらず、謙虚さゆえに、教授は、私たちの言語では十分な読者（Kundschaft）が不足していると嘆く方を好まれた。しかし、至る所で見られるミルトンの華麗で崇高な表現の強さや重みに目を向けるなら、そのような読者の不足というものは、まったくどこにも感じられない。しかし、語の組み合わせの優美を目指して、あちこちで何かが起こり、それでよく慣れたドイツ人の耳に粗野で不快なものとして響いたのだとしたら、このことは、翻訳者の能力のなさよりも翻訳者の祖国に原因があるとされねばならないのだろう。だがしかし、スイスの書き手で、ボードマー氏以上にその人の祖国というものが分かる書き手に私たちはまだお目にかかったことがない。」[23]

少々回りくどい言い方ではあるが、ミルトンの思考が伝わらないのは読者層の問題ではなく、スイス人の地が出てしまうボードマーの翻訳の問題ではないかということを示唆している。ミルトンの作品そのものを批判している様子はうかがえない。

このあと、この論者は訳語の検討に入る。まず、ドイツ語のタイトルに苦言を呈し[24]、それから、第３巻の冒頭部分からの訳文を長く引用したあとに、個々の訳語についての細かい注文を書き連ねている[25]。訳者に向けて、こうした指摘を悪く取らないでほしいと断っている一文も見られる[26]。そして、第３巻の内容を最後まで紹介して、この文章は終わる。末尾では、読者に対して、これで詩人の精神や奇妙な創作について十分分かるだろう、ということを述べ、またボードマーに対しては、真実らしさについて、ファーベル、パラーベル、アレゴリーについての約束の論考を私たちは期待して待っている、と催促の言葉を記している[27]。

４．ボードマーとゴットシェートの往復書簡（1732-39）

先にも触れたように、ボードマーは、1732 年 2 月 5 日の日付でゴットシェートに書簡をしたためて送り、同時に『失楽園』の訳書も送り届けている。それに対するゴットシェートからの返書が、同年 10 月 7 日付けの書簡である。返事を書き御礼を言うのが遅くなったのは、ボードマーの翻訳を紹介した『批判的論叢』を併せてお送りしようとしたからである、という。ここでゴットシェートは、翻訳の抜粋を作って『批判的論叢』に文章を載せた者について、自分ではないような書き方をしている。その筆者は、ボードマーに対する敬意や謙虚さを十分うかがわせていて、それと同時にいくらかの批評上の自由を行使しているのであるから、大目に見てやってほしい、としている[28]。しかし、書簡の最後では、『批判的論叢』第２号の評者と同じように、ミルトン擁護の書を待ち望んでいることを書いている。

「ところで私は、約束なさったミルトンを擁護するお仕事を早く拝見するのを望んでいます。実のところ、ミルトンの想像力がそうであったような、あのような無秩序な想像力（eine so regellose EinbildungsKraft）が許される規則（Regeln）を知りたいと切望しているのです。」[29]

このゴットシェートの最後の一言に、後の文学論争の萌芽を感じ取ることができるだろうし、規範詩学に対する想像力の位置付けの問題が文学論争の核だと見られてきたことの出発点を見ることもできるだろう。

それに対するボードマーの返信は、1732 年の年末に出されている。無秩序な想像力を許す規則を知りたいという求めについては、あまり喜ばしいとは言えない仕事に時間が取られているので、『失楽園』擁護の基盤にしたいと考えている主要な原則のみを紙に記して友人の〔ヨハン・クリストフ・〕クラウダー氏[30]に送った、と書いている。クラウダーがそれをゴットシェートに伝えてくれるだろう、ということである。そして、ボードマーが擁護の書を仕上げるまでの間、偉大な詩人であるミルトンを非難するようなことはしないでほしい、とゴットシェートに頼んでいる[31]。

ゴットシェートに対する仲介を依頼されたかたちのクラウダーが、翌年の 1733 年 2 月 27 日に書いているボードマーへの返信は、ミルトンを批判する者の視点を伝えていて、興味深い内容になっている。

「ご送付いただいたミルトンの擁護を、さもなくば喜んでミルトンを批判するさまざまな人たちの前で読んで聞かせました。彼らもすべての点に満足していましたが、神話に関しては別です。彼らの意見では、神話があまりにも頻繁に出てくる、それはすっかり取り除かれるべきだ、ということでした。同様に彼らは、この英雄詩が本来英雄であるはずの救世主に十分敬意を払っていない、と考えようとしています。まさにその理由として言っているのは、救世主がサタンとまったく比べものにならず、救世主の行為は、サタンが行っているよりももっと広範に書かれるべきだった、ということです。しかしアダムが主人公であるべきだというなら、全巻にわたってアダムがまったく見つけられないというのは同じように不当ということになります。これらに加えて、まさにこの批評者たちがさらに文句を言っているのは（彼らはホメロスやウェルギリウスにもそう言って非難するのですが）、後半の巻は、前半の巻に、美しさという点で見劣りする、ということです。そのため、才能が枯渇してしまったか、あるいは、苛立ちが募って、ついには、とても短いところで筆を折り、衰えのために結末まで急ぐほかなかったかのように見える、というのです。」[32]

クラウダーは、ボードマーが書いたミルトン擁護の草案と言えるものをゴットシェート教

授に届けたと、この手紙に明記している[33]。

このあとのゴットシェートからの返信は、1734年6月3日付けのものがチューリッヒ中央図書館で確認される[34]。ゴットシェートは冒頭で、長い間返信していなかったことについて事情を述べているが、ゴットシェート往復書簡集の編者は、これが1732年末のボードマーからの書簡に対する返信とは考えづらく、その間の手紙が失われているのだろうと推測している[35]。返信が遅れた事情の一つ、「私に起こった変化」というのは、詩学の員外教授であったのが論理学と形而上学の正教授となることと思われる。それにもう一つの理由、『全哲学の第一原理』の第2部を復活祭のメッセに刊行しなければならなかったというのが加わる。その間もゴットシェートは、より頻繁にボードマーと遣り取りしているクラウダーから、時折ボードマーについての報告を聞いていた、と書かれている。このゴットシェートの書簡では、ゴットシェートが、「我々は誰もが詩学の教授になれるわけではない」と述べつつ、しかし「自由学芸のことはいつも大いに気にかかることになるだろう」と吐露している点が印象的である。手紙の最後では、ボードマーによるミルトンの下巻を長い間待ち望んでいて、早く見たい、という希望が述べられている[36]。

これ以降も、ボードマーとゴットシェートとの間で書簡の往復は続いている。ミルトンが話題に上っているものに目をやると、1738年5月9日のゴットシェートからの書簡で、ゴットシェートはやはり、ボードマーのミルトン擁護の書を見てみたいと書いている。ガルリエル・ヒュルナーというスイス人の神学者が5月にライプツィヒに滞在し、1日と12日にゴットシェートのところを訪問しているのだが[37]、ヒュルナーとミルトンについて話したことが触れられて、そこからそのような話になっている。

> 「ご親切にもあなたが私に紹介してくださった学のあるご友人は、博識で洞察力もあり、私にはとても好感のもてる人物でした。・・・私たちは、ミルトンについて、そして、あなたがこの詩人を弁護されるであろう批判的著作について話しました。この擁護の書を拝見するのを大変心待ちにしています。そして、多くの者が私と同じ考えだろうと確信します。」[38]

公刊されていないヒュルナーの日記を、リュディガー・オットーがアーラウのアルヒーフで調べている。その日記の記載を見ると、5月1日のところに、「ゴットシェート氏のところに行った」[39]とあり、「ボードマー氏は日に日に良くなっている、スイスの画家はいま発行すればよかった、それならもっとよくなっただろう」[40]というゴットシェートの言葉が書き留められている。「スイスの画家」というのは、1720年代前半に発行していた『画家談論』のことだと思われる。このゴットシェートのコメントは、1738年の時点でのボードマーに対する見方を知る上で参考になる。

ゴットシェートがボードマーに手紙を書いたあとの5月12日にも、ヒュルナーは、ゴットシェートに招待されて、ゴットシェートの住まいを再訪している。日記には、ライプ

ツィヒで過ごした最良の日だったと書かれている。この日も、ボードマーのことが話題に上っている[41]。

また、オットーが日記を確認したところに拠ると、スイスに戻ったヒュルナーは、1738年の9月1日と3日にボードマーのところを訪れている。このときの日記には、ボードマーがゴットシェートやライプツィヒの協会のことを悪く言っている言葉が書き記されている。協会には大した人物はおらず、古いものを読まない哀れな駄弁家ばかり、という厳しい見方をボードマーがしていることが分かる[42]。

因みに、このヒュルナーは、1739年1月にベルンで、ライプツィヒのようなドイツ語協会をヨハン・ゲオルク・アルトマンとともに設立することになる。ベルンでのそのような動きを、ボードマーは、1739年4月1日の書簡でゴットシェートに伝えている[43]。エミール・エルネに拠れば、ヒュルナーはライプツィヒの大学で学んだ経験をもち、ゴットシェートを範として協会の活動を構想する。そこでは実際にライプツィヒの協会の刊行物を読んだりもしたようである。しかしまた、ボードマーやブライティンガーに支援を要請して、彼らの著作も尊重した。ただし、この協会はその後、チューリッヒとライプツィヒの間で文学論争が起こると、アルトマンとヒュルナーはゴットシェートの側を、フロイデンベルガーや他の多くの者はボードマーとブライティンガーの側を支持するかたちで分裂し、次第に活動が停滞していって、1747年に消滅してしまう[44]。

話を1738年の書簡に戻すと、7月30日のボードマーからの返信には、ミルトン擁護の書は完成しているものの、ブライティンガーの計画との関連で、置いておかなければならない、ということが書かれている。

> 「ミルトンの『楽園』の私の擁護は、たしかに、しばらく前に完成しているのですが、この地のブライティンガー教授が取り組んでいる『批判的詩論』のある種の章となる手はずであるため、この著作が仕上がるまでは、置いておかなければならないのです。この有能な人物が、その著作について最近さらに大幅に計画を変更し、3つの部分に分けることにしたので、今はいっそうゆっくりと進んでいます。第一の部分は、そもそも批判的詩論となるべき部分で、真実らしさ、ファーベル、不思議に思わせることなどを扱います。第二の部分はあらゆる種類の描写について、第三の部分は比喩について、詳しく根本から教えます。」[45]

この「3つの部分」というのは、その内容から見て、『批判的詩論』全2巻（1740）と『比喩の性質、意図、および使用についての批判的論考』（1740）として結実したものと考えることができる。

ボードマーは、『ドイツ詩の性格』という批評的な詩をゴットシェートに託し、それが『批判的論叢』の20号に掲載されることになるのだが[46]、この書簡のなかで次に、その掲載に向けた話をしている。ゴットシェートから雑誌の場所を与えられるという知らせがあり、

詩の全体を通して読んで、修正を加えた、と述べている。修正した多くの箇所は、耳が満足するということに留意して修正したという。それに続けて、ボードマーは、『失楽園』の翻訳もそのような改善を行いたいと思っていたと記す。自分自身でも粗野に響くと感じる言葉が多くあるが、ボードマーにはその作業が大変に思われたりしていることを、ゴットシェートに打ち明けている[47]。しかし、それと同時に、ある人が耳障りがよくないと言っても、別の人は安らかな響きだと言うことがある、というふうにもボードマーは述べており、さらには、隣り合った国同士でも心地よい響き、心地よくない響きに違いがあり、馴染んだ言語が最も穏和に感じられることになっているのではないか、との考えも示している[48]。

翌 1739 年 4 月 1 日には、ボードマーからゴットシェートに、手紙に添えようと思っていた『失楽園』擁護の書の見本刷り（Probe-Bogen）が自分の手元に届いたことが、追伸で伝えられている[49]。

同年 5 月 2 日の返信でゴットシェートは、ミルトン擁護の書と、比喩についての論考の初刷り（Anfangsbogen）に対して謝意を述べている。「この 2 つの書には、良き趣味を促進するのに多くの利点を期待しています」と書いている[50]。

同じ手紙のなかでゴットシェートは、『批判的論叢』の 21 号が数週のうちに完成するだろうと記しているのだが、その完成した 21 号を見ると、末尾のところで、ミルトン擁護の書と、比喩についての論考が紹介されている。新着書籍の報告のうち、「未印刷」のものの 1 番目がブライティンガーの比喩についての論考だが、ここでは、「ボードマー教授」が印刷中と聞いている、と書かれている。そして、目次の内容が紹介されている。「未印刷」の 2 番目に取り上げられるのがボードマーのミルトン擁護の書で、ミルトンの詩作品の美しさや技巧を詳しく説明し、ある種の批評家による非難から救うものである、と書かれている[51]。

5．ボードマーによるミルトン擁護の書（1740）

1732 年にボードマーによる新訳の初版が出て、ボードマーがその次の版の翻訳を出すのは 10 年後になるのだが、その前の 1740 年に、『詩における不思議なもの、ならびに、それを真実らしさと結合することについての批判的論考』という書を著している。この書の副題は、「ジョン・ミルトンの詩『失楽園』を擁護して」となっている[52]。これが翻訳の際に約束して、ゴットシェートから再三にわたり催促されていたミルトン擁護の書である。「不思議なもの」[53]と「真実らしさ」の結合は、同じ年のブライティンガー著『批判的詩論』でも中心になっている考え方で、この時期のスイス派の詩学の基本的な発想と言える。ここでは、序文と第 7 章に目を向けて、ミルトンを擁護するためのとりわけ大きな 2 つの観点を見ていくことにしたい。

a. ドイツにおける受容の問題

この書はミルトン擁護の書であり、ミルトンに対してなされている芸術評論家からの批判が念頭にある。序文では、『失楽園』はドイツ人にはそれほど楽しめるものではなかった、という批判の声が最初に取り上げられている。それに対して、ボードマーは、ドイツではまだあまり知られているとは言えない、ということを書いている。一堂に会して朗読する古代と違い、部屋で一人で詩を読む今の時代は、人々の間で感動が伝わりにくいという分析を披露する。

また、イギリスとドイツの違いという観点の説明も試みている。ボードマーに拠れば、ドイツの詩人の流儀では、崇高さは情念が喚起されないところで成立するものである。『失楽園』に多く見られる荘重さに関して言えば、ドイツでは高貴な楽しみに対して冷静さが見られるのに対して、イギリスではむしろそうしたところで感受性が強くなる。そこからボードマーは、ミルトンの信心がドイツ人の心を捉えないのは、詩人の問題ではなく、ドイツの読者の問題という見方を導き出す。ミルトンのような優れた詩人を知らないドイツ人は、平凡な詩人から感じるよくある楽しみをすぐには手放せないのだという。ボードマーは、次のような言い方もしている。

> 「ドイツ人は、ミルトンの作品において、なじみがない未知の、あまりに多くの高貴な種類の美によって、いわば不意を襲われ、混乱させられるのである。まるで長年暗い地獄に閉じ込められていた人が、あるとき快い陽の光が当たる場所に引っ張り出され、直面した美によって照らされるというより目が眩んでしまい、美を一つずつ認識するには時間を要するようなものである。イギリス人に対して有能な芸術批評家がミルトンの詩の美しさを徐々に知覚させ、それを知らしめてきたのだが、そうなる前にイギリス人が長い年月置かれていた状態にドイツ人は今なおいるのである。」[54]

こうした論評を好ましくないと感じる人にはより穏当な言い方として、ドイツ人には哲学的な学問や抽象的な真理に向いているところがあり、そのためしばらく前から、ドイツ人は理性的で論理的であると同時に、単調で味気なくなっている、とも述べている。

> 「悟性の楽しみが心の全体を占めてしまい、それが想像力の楽しみを抑え付けるのである。」[55]

想像力が楽しむという余地がドイツの読者にはない、というのがボードマーの見立てである。美的な作品を感じ取るのに必要な自由な精神がドイツ人には欠けている、とも述べている。

ボードマーは、「『失楽園』はドイツ語に訳したあとではもうミルトンの『楽園』ではな

い」という、翻訳の問題がドイツでの批判のポイントと見る別の視点も検討し、それを批判する。一般論として詩的作品の翻訳は原典に及ばず、それはミルトンの詩にも当てはまるという見方には、表現に関して英語はドイツ語よりも適しているとか、この詩の美しさの大部分は快い響きにその本質があるといった見方が前提にあるとすると、前者はドイツ人から、後者はイギリス人から異論が出るとされ、ボードマー自身、後者の論評について厳密さがほとんどないと考えていると述べる。『失楽園』には様々なものに由来するあらゆる美しさがあり、素材や構成などに由来するものは、たとえ巧みではない翻訳であってもいくらか輝き出るものであるという。ドイツの批評家たちが文句をつけてきたのは、翻訳の言語よりはミルトンの素材や構想だというふうにも書いている。こういう批評家たちがドイツの悪しき趣味にいっそう偏見を与えた可能性を、ボードマーは遠慮せずに指摘している。

ドイツの芸術批評家や詩人は、『失楽園』だけでなく『イリアス』、『オデュッセイア』、『アエネイス』、『解放されたエルサレム』にも敬意を払っていないので、ミルトンに敬意が払われないのは、芸術の側に不足や不十分さがあるのではなく、読者や芸術批評の側の能力不足に帰着するのではないか、とボードマーは疑っている。そして、すぐれた読者や芸術批評家が増えれば、もっと敬意が払われるようになる、と確信している。ボードマーは、新しい批判的な詩論がそのことに役立つと考え、まさにその意図で、アディソンが『失楽園』の美について論じこの作品をきわめて賞賛している考察を、翻訳して併せて印刷している[56]。

ここまで序文を見てきたが、ボードマーの見方は、ミルトンが評価されないのはドイツ側の読者や批評家に問題があるというものだと要約できる。

b．ミルトンの創作法と宗教の問題

この論考の本論は７章の構成で、最終の第７章では、神話をミルトンが詩に持ち込むことについて論じている。序文でボードマーは、ドイツの批評家はミルトンの詩の素材や構想に非難の矛先を向けている、と書いていたが、次に素材の問題ということで、この章で言及されるドイツの批評家からの、元はと言えばヴォルテールからのミルトン批判に触れておきたい。

ボードマーは、この章の出だしのところで、詩人が神話の話を用いることに対するヴォルテールの批判の言葉を引用している。ヴォルテールは、ミルトンが異教の神々は悪魔だと言いながら、異教の神話への仄めかしをしばしば行うのを、誤りだと述べている。ボードマーは、ドイツの芸術批評家の一人がこの批判をドイツでわざわざ広めていて、見過ごせないと言う[57]。

ボードマーの立場は、キリスト教徒の詩人であっても、異教の神話を詩の素材として用いて構わない、というものである。ボードマーが言うには、誤りや異端というものは、信

じられ教えられることで汚点となるのであって、それを耳にしたり言及したりするだけでは汚点とならないし、詩人にはあらゆる時代、あらゆる国、あらゆる宗教の人物を引き合いに出す権利がある。従って、神話の話を語るだけで誰かを惑わす危険はないし、純粋で理性的な宗教であるキリスト教にとって危険で脅威だと言うのは、神話の話に栄誉を与えすぎている[58]。

さらに、神話の宗教から劇中の人物を取り入れている場合には、神話の話そのものを真理として語ることも許されてくる[59]。ボードマーはこうしてヴォルテールの非難の根拠となるような点を否定し、ヴォルテール自身がこうした根拠をどれも示したくなくなれば、神話の話に言及するのを非難しなかったし、登場人物の口から語られるのを非としなかったと考え、ヴォルテールの批判は、神聖な登場人物の性格や行動と、神話の神や半神のそれとを混同してしまったとしか思えない、と述べる。こうしたヴォルテールの予断があって、それを基にドイツの批評家が「ミルトンは異教の話を引き合いに出している」と言うのではないか、というのがボードマーの見方である[60]。

ボードマーは著述家であり文献学者だが、同時に聖職者であり神学者でもある。この書の文中でもボードマーは、キリスト教を「我々の真の宗教」、イスラム教を「虚偽の宗教」と書くなど、そういう意味での立ち位置ははっきりしている[61]。その保守的なプロテスタントであるボードマーが、ミルトンの創作に異教的なものを認めて非難することはしない。

第７章のある箇所では、ミルトンは異教の神話を欺瞞だと考えていて、とりわけギリシアの神々を嘲笑っている、と書かれている[62]。ヴォルテールは、そうした神々の行為を引き合いに出してきたミルトンはそれだけ許されないと言うが、ボードマーに言わせれば、それは逆にむしろミルトンを正当化することである。何故なら、そうした欺く所業の物語があることで、詩人の描写に光や生命や尊厳が広められるし、また、誤ったものによって、ミルトンの詩のなかの不思議なものがより真実らしくされるからである[63]。つまり、異教の神々は、ミルトンの詩においては、引き立て役のようなものなのである。

６．ブライティンガー『批判的詩論』第２巻の翻訳観（1740）

前節で見たボードマーによるミルトン擁護の書と同じ年に、ブライティンガーによる『批判的詩論』２巻が、ボードマーの序言を付したかたちで出版されている。その第２巻の２章と４章にもミルトンの『失楽園』への言及があるので、目を向けておきたい。

第２章は、力強い言葉（MachtWort）がテーマの章で、ミルトンの『失楽園』の翻訳に多くのページを割いている。

ブライティンガーは、『失楽園』の具体論に入る前に、ポエジー一般や叙事詩について次のように記している。

「ポエジーは、総じて、物事を単に真実らしく表現するだけでなく、真理の見かけから意図的に引き離して、見た目では完全に不思議なものにするという点で、語りの他のすべてのジャンルを越えている。それと同じように、とりわけ叙事詩では、不思議なものが支配的にならねばならず、またそれ故、表現自体もまた、よくある通常通りの語り方からは離れることになる。」[64]

その上でさらに、ミルトンの詩は、素材という点から見れば、超自然的な性質の異界の者たちばかりが出てくるため、ふつうの人間たちから区別するのに、通常とは異なる表現法が必要となる、ということが主張される。つまり、詩の素材の問題が用いる言葉の問題につなげて考察されている。ここでのブライティンガーの考えに拠れば、作者や訳者には、言語の宝の山から、そうした登場者たちの語りの力強さを亢進させ、語る者の高貴な性格を認識させる表現を掻き集めることが許される。そのことから、ブライティンガーは、ミルトンの翻訳者にはある種の「自由」があると言う。思慮と努力と謙虚さを伴いつつではあるが、ミルトンの翻訳者は、古くても力強い言葉を、今日の使用基準から逸脱しながら用いることができる。そこに翻訳者の自由がある、ということである[65]。

また、古くはあるが力強い言い回しや言葉を用いるのは、ルターが聖書をドイツ語に訳したときに用いた手法でもある、とブライティンガーは述べる。そして、そのルターの翻訳は今やキリスト教徒の間ですっかり広まっているので、そこで使われた言葉を積極的に用いていかなければならない、としている[66]。

ただし、その一方で、「翻訳の技術について」という第４章では、原典を再現する忠実な翻訳がよいという考え方がうかがえる。

「翻訳というのは、似ていれば似ているほどより賞賛を受ける模造品である。・・・ミルトンは、翻訳においても、原典と同じように、私たちに、崇高で不思議な形象や描写を、まさに秩序立って、イメージさせなければならないし、ドイツの読者の心に高貴な考えや変化に富んだ動きを生み出さなければならない。読者は、表現が英語でまとっていた記号（Zeichen）が分かれば、そうした考えや心の動きを知覚し感受するのである。」[67]

翻訳における自由と言っても、「原典の表現から好きなように離れる自由」[68]は否定されている。

第２章では、ミルトンの訳し方との関連でルターに触れたあと、72 ページから 90 ページまで、ボードマーの訳した『失楽園』の表現に関して、具体的な言葉を取り上げて論じており、そこでは、ザクセンの「言語教師」や「検閲」のコメントも吟味の俎上に上げられているが、基本的には、訳語の選択という水準の議論と言える。

7．結びに代えて

本稿では、『失楽園』を翻訳して印刷するところから、出版された翻訳書で予告されたミルトン擁護の書が出るまでを見てきた。最後には、ミルトン擁護の書と同年に出されたブライティンガーの『批判的詩論』の翻訳観も一瞥した。チューリッヒとライプツィヒの間には、ミルトンに対する見方の相違はすでにうかがわれるものの、この間の手紙の遣り取りなどを見る限りでは、まだそれほど大きな論争は生じていないと言える。前号で取り上げたのクロップシュトックをめぐる論戦に比べたら、穏やかな遣り取りと見れるだろう。しかし、論点は徐々に浮かび上がってきているので、最後にその整理を試みたい。

ミルトンをめぐる考え方の相違は、ボードマー、ブライティンガーとゴットシェートの間にあっただけではない。出版を試みていた当初から、『失楽園』は検閲で問題視されていたと推定される。宗教的な素材、神聖な主題をあまりにも夢想的な内容にしてしまっていて、世俗的な書物の形式を与えていることが、間違いだと捉えられていたようである。

ボードマーから翻訳書を贈られたゴットシェートが 1732 年 10 月の返事の手紙で、ミルトンの想像力を無秩序（regellos）だと言い、それが許される規則（Regeln）を知りたいと書いていたことは印象的である。そう言ってゴットシェートは、ボードマーによるミルトン擁護の書を催促していた。

クラウダーが伝えるライプツィヒ側の批判者の言葉には、神話が頻繁に出てくることへの批判、サタンが救世主よりも主役になっていることへの批判があった。ミルトン擁護の書でも、第 7 章で異教の神話を素材として用いることが論じられているが、ボードマーは、そうしたミルトンの創作法を容認していて、この点では、ライプツィヒ側とは相容れない立場がうかがえる。

聖書の素材から広げられたその崇高な内容だけでなく、さらにその内容とそれを表現する言語の関係も問われた。ミルトンには、古くからの力強い言葉を用いるなどの手法が見られるとボードマーが述べ、翻訳者にもそのような自由が許されるとブライティンガーが述べた。

ライプツィッヒの『批判的論叢』の筆者には、散文訳には押韻の制約によって原文に忠実な訳ができなくなるという欠点がなくてよい、という考え方も見られた。

言語の問題はさらに、英語とドイツ語の違い、英語圏の読者とドイツ語圏の読者の違いという問題に展開する。言語表現上の工夫として用いられたメタファーが耳慣れない読者には快くないという観点から、ドイツ語圏の読者によい趣味を育てるということをボードマーは考えた。それに対して、『批判的論叢』の評者からは、ドイツ人の耳に不快だとしたら、スイス人の地が出てしまう翻訳者の力不足ではないかとの仄めかしがなされた。

1738 年 7 月 30 日のボードマーの書簡では、耳が満足するという観点から翻訳の改善を行いたいと書かれていたが、これは初版の前書きと同じ方向性の発想である。その書簡には、耳に心地よいというのは個人によって差があり、どの言語をどの国の人が聞くかによ

っても差があるということが書かれていた。

1740年のミルトンの擁護の書では、ボードマーは、単にドイツの読者にはある種のメタファーが耳慣れないといった次元からさらに射程を拡張して、ドイツの読者は優れた詩人、高貴な美に馴染みがないという議論を行っていた。ドイツ人は、長年暗い地獄に閉じ込められていて、陽の光には目が眩むと言われていた。あるいは、哲学的な学問や抽象的な真理に向かう悟性の楽しみが心を占めていて、想像力の楽しみが抑え付けられるとされた。ミルトンを訳すなかで、ボードマーの批評精神には、崇高なものとの関わりで、国民性という視点が重要なものとして立ち現れている。

ミルトン擁護の書には、ドイツの批評家に評判がよくなかったのは、翻訳の言語よりもミルトンの素材や構想だというボードマーの言葉もあった。そしてそれは、批評家の批評眼に問題があるとボードマーは考えていた。

こうして見ると、多様な議論がなされているように思われるが、大きく分ければ、宗教的な素材をどのような内容に構成しているかというミルトンの創作面の問題と、そうした内容を表現するのにどのような言語手段をとるのかという原作や翻訳の表現面の問題があると言える。創作の内容について、ボードマーの側は、ミルトンの作品には崇高な精神があると言い、ゴットシェートの側は無秩序な空想だと考えている。表現方法について、ボードマーは耳に快い響きの言葉ということを考え、ドイツ語ではそれがどういう言葉になるのかを模索しようとしていて、それをゴットシェート宛ての書簡にも記している。しかし、ボードマーやブライティンガーには、ミルトンのこうした素材の叙事詩には、通常の言葉とは異なる古くても力強い言葉が必要だという考えも見られた。

ただし、1740年以降、いわゆる文学論争はこれから本格化するのであり、ここまでの整理はあくまでも中間的なまとめということになる。ミルトン擁護の書が刊行されたので、ミルトンやその翻訳をめぐって、『批判的論叢』24 号の反応やスイス派のさらなる反論を中心に、その後の展開を次稿で取り上げたい。1740年の『批判的論叢』24号の論考は、ボードマーのミルトン擁護の書を取り上げているのだが、ここから明瞭に対立はエスカレートしていくと言える。

クロップシュトックをめぐる論戦を取り上げた前号で見られた視点は、『救世主』という詩に表れているのが崇高の精神なのか、健康的な理性から逸脱した熱狂の精神なのか、その表現方法はバロック的な虚飾なのかどうかであった。時間的にそれよりも前の時期に当たるミルトンをめぐる論戦の論点がどのように選択され形成されていくのか、原典や翻訳の作品は自然模倣からのある種の逸脱なのかどうか、そして、クロップシュトックを評価するときの観点に自然と結び付いていくのか、稿を改めて検討を続けたい。

[1] [Johann Jacob Bodmer und Johann Jacob Breitinger:] Von dem Einfluss und Gebrauche Der Einbildungs-Krafft. 1727

[2] Johann Miltons Verlust des Paradieses. Ein Helden-Gedicht. In ungebundener Rede übersetzt. 1732

[3] John Milton: Das Verlustigte Paradeis. Auß Johann Miltons Zeit seiner Blindheit In Englischer Sprache abgefaßten unvergleichlichen Gedicht In Unser gemein Teutsch übertragen und verleget Durch E. G. V. B. 1682

[4] 福田覚「文学論争におけるクロップシュトックの評価－文学論争の再考にむけて－」、『ドイツ啓蒙主義研究１７』、2020、1-10 頁

[5] Hans Bodmer: Die Anfänge des züricherischen Milton. In: Studien zur Litteraturgeschichte. Michael Bernays gewidmet von Schülern und Freunden. 1893, S.190f.

[6] ibid. S.197 ブライティンガーも 1724 年１月（日付なし）にツェルヴェーガーに宛てて、ボードマーの翻訳は数週もしないうちに終わるだろうと書いている。ibid. S.188

[7] ibid. S.197

[8] Johann Christoph Gottsched: Briefwechsel unter Einschluß des Briefwechsels von Luise Adelgunde Victorie Gottsched, Bd.2: 1731-1733, hrsg. von Detlef Döring u.a. 2008, S.181

[9] Josephine Zehnder, geb. Stadlin: Pestalozzi. Idee und Macht der menschlichen Entwicklung. 1875, S.235; Vgl. Wolfgang Bender: Johann Jakob Bodmer und Johann Jakob Breitinger. 1973, S.45; Thomas Bürger: Aufklärung in Zürich. In: Archiv für Geschichte des Buchwesens. Bd.48. 1997, S.43

[10] Zehnder, S.236

[11] Bürger, S.43, Anm.30 に拠る。記述があるのは、Neues Schweizerisches Museum Bd.1, Heft1, 1793, S.802 (Nr.583)

[12] Bürger, S.43f. ボードマーが金銭面の支援を行っていることは、1732 年 4 月 23 日のツェルヴェーガー宛ての書簡から分かる、とベヒトルトは書いている。Vgl. Jakob Bächtold: Geschichte der deutschen Litteratur in der Schweiz. 1892, [Die neue Zeit] S.159

[13] a.a. O. (Anm.2) unpag.

[14] ibid. unpag.

[15] ibid. unpag.

[16] ibid. unpag.

[17] ibid. unpag.

[18] ibid. unpag.

[19] 『批判的論叢』については以下を参照。福田覚「ピューラの『アエネーイス』訳の掲載をめぐって－ゴットシェートとの関係を語る一つの挿話」、『希土』41 号、33 頁以下（「『批判的論叢』という雑誌－古典翻訳の重視」の節）

[20] Beyträge Zur Critischen Historie Der Deutschen Sprache, Poesie und Beredsamkeit, herausgegeben von Einigen Mitgliedern der Deutschen Gesellschaft in Leipzig. Bd.1(Erstes Stück). 1732, S.85-104（以下、誌名については Beyträge と略記）

[21] Beyträge, Bd.1(Zweytes Stück). 1732, S.290

[22] ibid.

[23] ibid. S.291f.

[24] ibid. S.292 このタイトルに関する苦言に対して、ボードマーは、1738 年 7 月 30 日付けのゴットシェート宛書簡で、こうしたタイトル表現は許容されるべきだと書いている。Vgl. Johann Christoph Gottsched: Briefwechsel unter Einschluß des Briefwechsels von Luise Adelgunde Victorie Gottsched, Bd.5: 1738-1739, hrsg. von Detlef Döring u.a. 2011, S.200

[25] Beyträge, Bd.1(Zweytes Stück). 1732, S.293-296

[26] ibid. S.296

[27] ibid. S.303

[28] Gottsched: Briefwechsel, Bd.2. S.307

[29] ibid. S.309

[30] クラウダーはゴットシェートの比較的広い範囲のサークルに属する、とベンダーは想定していた。Vgl. Nachwort von Wolfgang Bender, S.6* In: Johann Miltons Epische Gedichte von dem Verlohrnen Paradiese. Faksimiledruck der Bodmerschen Übersetzung von 1742. (Deutsche Neudrucke. Reihe Texte des 18. Jahrhunderts) 1965；クラウダーは、1701 年ナウムブルクの生まれで、ザクセン選帝侯領の公使館参事官ならびにドレスデンの枢密官房文書館の管理人であったとされる。Vgl. Wolfgang Bender: Johann Jakob Bodmer und Johann Jakob Breitinger. 1973, S.46

[31] Gottsched: Briefwechsel, Bd.2. S.361

[32] Johannes Crüger: Joh. Christoph Gottsched und die Schweizer J.J.Bodmer und J.J.Breitinger. 1882, S.57f.

[33] ibid. S.58 ヴォルフガング・ベンダーに拠れば、ボードマーの遺品のなかに 15 通のクラウダーからの書簡があり、チューリッヒ中央図書館に保管されている。実際に、オンラインのカタログでも所蔵が確認される。Vgl. Nachwort von Wolfgang Bender, S.6* In: Johann Miltons Epische Gedichte von dem

Verlohrnen Paradiese. Faksimiledruck der Bodmerschen Übersetzung von 1742. 1965; Wolfgang Bender: Johann Jakob Bodmer und Johann Jakob Breitinger. 1973, S.46

[34] Johann Christoph Gottsched: Briefwechsel unter Einschluß des Briefwechsels von Luise Adelgunde Victorie Gottsched, Bd.3: 1734-1735, hrsg. von Detlef Döring u.a. 2009, S.110

[35] ibid. S.110 (Anm.1)

[36] ibid. S.110-113

[37] Vgl. Gottsched: Briefwechsel, Bd.5. S.126 (Anm.2)

[38] ibid. S.126

[39] Rüdiger Otto: Gesprächsprotokolle. Die Tagebuchaufzeichnungen des Schweizer Theologen Gabriel Hürner während seines Aufenthaltes in Leipzig im Mai 1738. In: Markus Cottin, Detlef Döring und Cathrin Friedrich (hg.): Leipziger Stadtgeschichte. Jahrbuch 2010. 2011, S.101

[40] ibid. S.102

[41] ibid. S.123-125

[42] ibid. S.102 (Anm.24)

[43] Gottsched: Briefwechsel. Bd.5, S.375

[44] Vgl. Emil Erne: Die schweizerischen Sozietäten. 1988, S.165-169

[45] Gottsched: Briefwechsel. Bd.5. S.198f.

[46] Beyträge, Bd.5 (Zwanzigstes Stück). 1738, S.624-659

[47] Gottsched: Briefwechsel. Bd.5. S.199

[48] ibid.

[49] ibid. S.376

[50] ibid. S.398

[51] Beyträge, Bd.6 (Ein und zwanzigstes Stück). 1739, S.169f. ブライティンガーは、1739 年 6 月 1 日に、この自著について触れた書簡を自分自身の手でゴットシェートに送っている。Vgl. Gottsched: Briefwechsel. Bd.5. S.431

[52] Johann Jacob Bodmer: Critische Abhandlung von dem Wunderbaren in der Poesie und dessen Verbindung mit dem Wahrscheinlichen. In einer Vertheidigung des Gedichtes Joh. Miltons "Von dem verlohrnen Paradiese" ; Der beygefüget ist Joseph Addisons Abhandlung von den Schönheiten in demselben Gedichte. 1740

[53] das Wunderbare を「不思議なもの」と暫定的に訳している。以前は「奇異なもの」という訳語を当てていたこともある。

[54] a.a.O. (Vorrede des Verfassers an die deutsche Welt) unpag.

[55] ibid.

[56] ibid. S.223f.

[57] ibid. S.197f.

[58] ibid. S.201

[59] ibid. S.202

[60] ibid. S.206

[61] ibid. S.205

[62] ibid. S.210

[63] ibid. S.211

[64] Johann Jacob Breitinger: Fortsetzung Der Critischen Dichtkunst Worinnen die Poetische Mahlerey in Absicht auf den Ausdruck und die Farben abgehandelt wird : Mit einer Vorrede eingeführet von Johann Jacob Bodemer. 1740, S.67

[65] ibid. S.69f.

[66] ibid. S.71f.

[67] ibid. S.139f.

[68] ibid. S.141